

日本民俗学会 第77回年会（於・奄美大島）

第3回 サークュラー

1. 大会概要

主催 一般社団法人 日本民俗学会

共催 奄美市

後援 鹿児島民俗学会、奄美郷土研究会、沖縄民俗学会

あまみエフエム、奄美テレビ、奄美新聞社、南海日日新聞社

龍郷町、大和村、宇検村、瀬戸内町

期日 奄美大島での大会（対面）とオンライン研究発表会に分けて行います。

◆奄美大島大会

2025年11月1日（土）・2日（日）・3日（月）

会場 アマホーム PLAZA（奄美市市民交流センター）

奄美市名瀬柳町2番1号

◆オンライン研究発表会

2025年11月8日（土）

2. 大会プログラム

11月1日（土） 公開シンポジウム・授賞式・総会・懇親会

11:30～ 受付開始（アマホーム PLAZA 1階マチナカリビング）

12:20～12:30 開会挨拶（会長・実行委員長・奄美市長）

12:30～15:30 公開シンポジウム（アマホーム PLAZA 1階マチナカホール）

「日本の〈南〉の民俗学—鹿児島・奄美・沖縄—」

15:40～17:50 研究奨励賞・日本民俗学賞授賞式、会員総会

18:30～20:30 懇親会（会場：ロードハウス ASIVE（アシビ））参加者の方は、年会受付に案内を置いておりますので、お受け取りください。

11月2日（日） 研究発表会

9:00～ 受付開始（アマホーム PLAZA 1階マチナカリビング）

9:30～12:00 研究発表（アマホーム PLAZA 内1～3階各会場）

12:00～13:00 休憩

13:00～16:00 研究発表

※プログラム内容は変更となる場合があります。

※実行委員会では宿泊等の斡旋は行いません。

11月3日（月・祝） 臨地研修 「奄美大島北部めぐり」

奄美市名瀬（集合場所は当日受付で配布）を出発し、奄美空港に到着します。再び奄美市名瀬に戻るバスの用意はございません。戻られる方はしまバス等をご利用ください。

【笠利方面コース】 奄美市名瀬 8:00 発 ➡ 空港 11:30 着（3時間30分・昼食なし）

研修予定箇所「ノロのトネヤ跡・有盛神社・城間トフル墓群等」

【龍郷方面コース】 奄美市名瀬 8:30 発 ➡ 空港 13:30 着（5時間・昼食あり）

研修予定箇所「近世墓群・秋名のアラセツ行事の実施地・赤尾木のハヤ墓等」

※各コース締め切りました。

【参考・主な航空ダイヤ】

	東京行		大阪行	
JAL	奄美空港発	羽田空港着	奄美空港発	伊丹空港着
	14:30	16:25	12:30	13:55
Peach	奄美空港発	成田空港着	奄美空港発	関西空港着
	10:45	12:50	15:30	17:00
	日・月・水・金・土曜日に運行		日・水・金曜日に運行	

※スカイマークで、鹿児島経由の羽田・名古屋・神戸行の便もございます。

※JALで、福岡・鹿児島・沖縄経由で乗り継ぐ便もあります。

11月8日（土）オンライン研究発表会

開催時間は10:00～16:00となります。

※発表要旨集（電子版・PDFファイル）の入手方法は、参加申込をされた方にはメールで、当日参加の方には受付でお伝えします。

※オンライン研究発表会への参加方法は、発表要旨集作成費をお支払いくださった方全員にメール又は文書でお伝えします。

3. 会場アクセス ※21頁地図参照

①バス（奄美空港から約60分）

しまバス空港線「こしゅく第1公園」または「平田町奥又」行に乗車

バス停「奄美空港」から乗車 バス停「ウエストコート前」下車

②徒歩（バス停から約7分）

バス停「ウエストコート前」からアマホーム PLAZA（奄美市市民交流センター）まで徒歩

4. 年会参加者の皆さまへ

①受付

・発表要旨集印刷費（印刷版）の購入を事前申し込みされ、代金納入済みの方は、受付にてお受け取り下さい。当日払いは申込の有無にかかわらず、残部に限り現金で購入できます。

お釣りが出ないようにご準備ください。

・当日欠席になった場合でも、すでにお支払いいただいた諸経費の返金はいたしかねます。

②名札

・会場では常時、名札をお付けください。名札には懇親会費の支払いについての記載があります。懇親会には、必ず名札を付けてご参加ください。

③懇親会 ※21 頁地図参照

- ・懇親会は1日（土）18時30分より、「ロードハウス ASIVE（アシビ）」（奄美市名瀬金久町4-3）にて行います。会場案内は年会受付に置いてあります。
- ・懇親会場に入場する際には、名札を懇親会受付のスタッフにご提示ください。
- ・懇親会の当日申込はできません。事前支払いがない場合には、当日料金 6,000 円を受付にてお支払いください。連絡がなく欠席の場合には、事後でも請求させていただきます。
- ・懇親会には荷物置き場を用意しますが、盗難・紛失・毀損などについて、実行委員会としては一切責任を負いかねます。貴重品は各自で保管をお願いいたします。

④休憩・昼食

- ・当日、会場での弁当の販売はいたしませんので、各自でご用意ください。会場近辺にはコンビニエンスストア、スーパーマーケット、飲食店があります。
- ・アマホーム PLAZA には飲み物の自動販売機がございます。また、2日（日）は休憩室（アマホーム PLAZA 3 階小多目的室）を設けますのでご利用ください。なお、1 階マチナカリビング以外での飲食は禁止となっておりますのでご理解ください。

⑤書籍販売・頒布・研究活動等情報提供ブース

- ・以下のとおり、アマホーム PLAZA 1 階マチナカリビングに書籍販売・頒布・研究活動等情報提供ブースを設けます。
 - 1 日（土） 11：30 ～ 16：00（シンポジウム閉会＝15：30）
 - 2 日（日） 9：30 ～ 16：30（一般発表最終＝16：00）
- ・年会期間中は常時開場しています（懇親会・臨地研修中は閉鎖）。2日（日）は 17：00 に完全撤収となります。年会参加の皆様はチラシコーナーに自由にチラシ等を置いていただけますので、ぜひご活用ください。なお、年会終了時に残ったチラシは事務局で処分いたします。

⑥託児所

- ・託児所を利用される会員には、事務局より直接ご連絡いたします。

⑦バリアフリー設備

- ・車椅子対応の施設となっています。

⑧その他

- ・喫煙所は、外の駐車場内にあります。それ以外の場所での喫煙はご遠慮ください。
- ・会場内では携帯電話・スマートフォン等での通話はご遠慮ください。
- ・会場内で何かご不明な点がございましたら、スタッフまでおたずねください。

5. 対面での個人発表（課題セッション含）の皆さまへ

①使用機材

- ・発表会場の各教室には、一律に以下の設備を用意します。
 - （1）HDMI ケーブル

(2) プロジェクター

- ・PC 使用の場合は各自でご持参下さい。お手持ちの PC に（１）の接続端子があるかご確認下さい。もしくは（１）に接続するアダプターを各自でご用意下さい。
- ・設置されている機材は動画や音声の出力にあまり適していない会場もあります。
- ・実行委員会では事前のデータの預かりには対応いたしません。
- ・会場では利用できる Wi-Fi がありません。オンライン環境を前提としたプレゼンテーションは各自の責任でお願いいたします。

②配付資料

- ・配付資料がある場合は、あらかじめ 30 部以上をご用意ください。
- ・実行委員会では配付資料の事前預かりおよび印刷には対応いたしません。またホチキス・ステープラー等の貸出も行っておりません。
- ・配付資料は、各会場入り口付近に長机を用意しますので、開始後はそちらに配置いたします。発表終了後もそのままにしてくださいが、会期後は処分いたします。

③発表受付（2 日）

- ・発表者は発表の 30 分前までに発表会場入口で受付をお済ませください。その際、ご用意いただいた資料を会場スタッフにお渡しください。ただし、午前最初の発表者は 9 時 15 分までに、午後最初の発表者は 12 時 45 分までに会場受付をお済ませください。
- ・発表者は、直前の発表が始まるまでに発表会場の「次発表者席」に着席のうえ待機してください。ただし、午前最初の発表者は 9 時 20 分より、午後最初の発表者は 12 時 50 分より待機してください。
- ・午前中の発表者には 9 時から 9 時 20 分まで、午後の発表者には 12 時 30 分から 12 時 50 分まで、機器の動作確認のための時間を設けます。

④発表時間

- ・発表 20 分・質疑応答 5 分とし、以下のようにベルで時間をお知らせします。終了時間は厳守していただくようお願いいたします。
 - 17 分経過ベル 1 回（発表終了 3 分前）
 - 20 分経過ベル 2 回（発表終了）
 - 25 分経過ベル 3 回（質疑応答終了）
- ・発表者や座長の交代、聴講者の移動のため、各発表の間に 5 分の時間をとります。この時間は発表延長のための時間ではありませんのでご注意ください。
- ・発表者の責任により発表の開始が遅れた場合には定刻の範囲内で発表・質疑応答を行ってください。

6. グループ発表の皆さまへ

①発表受付

- ・グループ発表の代表者はメンバーが揃ったことをご確認のうえ、発表予定時刻の 15 分前ま

でに発表会場の受付をお済ませください。

②発表時間

- ・グループ発表の時間枠は 120 分です。グループ発表には、座長・タイムキーパーは手配いたしません。進行、質問の受付、時間配分などの運営は決められた時間内で、各グループで自由に決めてください。
- ・終了時間の厳守をお願いいたします。

③使用機材・配付資料

- ・使用機材と配付資料については、個人発表に準じますので、前項をご覧ください。

7. 対面発表の座長の皆さまへ

- ・ご担当の発表が始まる 30 分前までに各会場スタッフにお申し出のうえ、10 分前までに発表会場の「次座長席」にご着席ください。ただし、午前最初の座長の方は 9 時 20 分より、午後最初の座長の方は 12 時 50 分より待機してください。
- ・「5. 個人発表の皆さまへ ④発表時間」に記した時間どおりにタイムキーパーがベルを鳴らします。このベルを参考にして、発表が時間どおりに行われるようご配慮をお願いいたします。
- ・進行中に問題が生じた場合は、各会場スタッフへお申し付けください。

8. 対面発表の欠席等の連絡について

- ・11 月 2 日（日）に研究発表を予定している方で、欠席せざるをえなくなった場合には、すみやかに年会実行委員会事務局（nenkai77@fsjnet.jp）までご連絡ください。会場に掲示を出すとともに、座長にその旨を連絡いたします。
- ・同様に、座長を担当予定の方で、遅刻・欠席をせざるをえなくなった場合には、すみやかに上記実行委員会事務局のアドレスにご連絡ください。
- ・発熱・咳等の体調不良の場合には、参加のキャンセルをご検討ください。
- ・欠席の連絡は随時受付いたしますが、遅くとも当日（11 月 2 日）午前 8 時までにはメール連絡をお願いいたします。これを超過した場合、無届の欠席として扱います。

9. オンライン発表の皆さま

①使用機材

- ・発表は ZOOM を用いたオンラインミーティングで実施します。
- ・発表者は、各自の PC で ZOOM に接続し、画面共有およびビデオと音声の使用ができることを事前にご確認ください。
- ・可能な限り安定したインターネット接続が確保される環境で参加してください。

②配付資料

- ・対面発表同様、配付資料の事前配付は行いませんので、配付資料がある方は発表を始める

前にチャットで参加者に送信ください。

- ・配付資料は公衆送信となりますので、使用する文献、データ、図版、写真、動画等の著作物については、著作権、著作隣接権および肖像権に配慮し適正に使用してください。これらの権利に関して第三者から損害を被ったとの申し出があった場合は当事者同士で解決するものとし、年会実行委員会・学会は何ら責任を負わないものとします。

③発表受付（８日）

- ・午前の発表者は９時３０分から９時５５分までの間に、午後の発表者は１２時３０分から１２時５５分までの間に、自分の発表会場の ZOOM ミーティングに接続して、画面共有の確認をしてください。
- ・発表者は発表の３０分前までに自分の発表会場の ZOOM ミーティングに接続して待機してください。ただし、午前最初の発表者は９時５５分より、午後最初の発表者は１２時５５分より待機してください。

④発表時間

- ・発表 20 分・質疑応答 5 分とし、以下のように座長（タイムキーパー）が声で合図をします。
終了時間は厳守していただくようお願いいたします。
17 分経過（発表終了 3 分前）
20 分経過（発表終了）
25 分経過（質疑応答終了）
- ・発表者や座長の交代、聴講者の移動のため、各発表の間に 5 分の時間をとります。この時間は発表延長のための時間ではありませんのでご注意ください。
- ・発表者の責任により発表の開始が遅れた場合には定刻の範囲内で発表・質疑応答を行ってください。

⑤その他

- ・当日、欠席せざるをえなくなった場合には、すみやかに年会実行委員会事務局までご連絡ください（nenkai77@fsjnet.jp）。
- ・同様に、座長を担当予定の方で、遅刻・欠席をせざるをえなくなった場合には、すみやかに上記年会実行委員会事務局のアドレスにご連絡ください。
- ・欠席の連絡は随時受付いたしますが、遅くとも当日（11 月 8 日）午前 9 時までにはメール連絡をお願いいたします。これを超過した場合、無届の欠席として扱います。

10. 対面研究発表（11月2日・アマホーム PLAZA）

■ A 会場（1階マチナカホール）

課題セッション「日本の〈南〉の民俗学―鹿児島・奄美・沖縄―」

- A - 1 9:30～9:55 角南聡一郎（奈良県）
金関丈夫・国分直一と南島民俗―物質文化を中心として―
- A - 2 10:00～10:25 山本芳美（都留文科大学）
民俗学者・植松明石の奄美ならびに沖縄における業績をふりかえり、島々をつなぐ
- A - 3 10:30～10:55 武井基晃（茨城県）
同時代を共にすごした家族たち―琉球家譜から再現する近世の世帯構成―
- A - 4 11:00～11:25 越智郁乃（宮城県/東北大学）
位牌の象徴化・慰霊碑の墓化―家祭祀からみる沖縄戦戦死者の位相―
- A - 5 11:30～11:55 森田真也（筑紫女学園大学）
沖縄国際海洋博覧会における海と「沖縄文化」

昼食休憩

- A - 6 13:00～13:25 郭 立東（東京大学大学院人文社会系研究科）
統制された聖地と囁かれる祈り―久米至聖廟にみる民俗・宗教・政治の交錯―
- A - 7 13:30～13:55 古谷野洋子（神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員）
十六日祭に來訪する死霊の変化と靈魂觀―沖縄県宮古地方狩俣集落の事例から―
- A - 8 14:00～14:25 永迫俊郎（鹿児島大学）
南九州・種子屋久・奄美群島の地域性のラフスケッチ
：地理学から民俗行事をみるために
- A - 9 14:30～14:55 久留ひろみ（NPO 法人奄美食育食文化プロジェクト）
酒造りと女性―奄美大島における「新穂花の神酒（ミキ）造り」から―
- A - 10 15:00～15:25 小野恭一
（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）
種おろしと餅をもらう來訪神
- A - 11 15:30～15:55 政岡伸洋（東北学院大学）
薩摩藩による奄美支配の強化と沖永良部島の世之主伝説

■ B 会場（3階大多目的室）

- B - 1 9:30～9:55 小柳花音（関西学院大学大学院）
「樟脳売りの国隆」にみる「異人」像の変化
- B - 2 10:00～10:25 鍋田尚子（神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員）
ベトナムの竈神の神体の変遷と台所道具―奄美・沖縄の竈神との比較の可能性―

- B - 3 10:30～10:55 福 寛美 (法政大学沖縄文化研究所)
酒井卯作と奄美
- B - 4 11:00～11:25 源 園生 (國學院大學大学院特別研究生)
「町奉行」からみる「与論十五夜踊り」の成立
—義也・水野十郎左衛門・唐犬権兵衛の闊歩した時代—
- B - 5 11:30～11:55 塩月亮子 (跡見学園女子大学)
沖縄におけるエンディング・ツーリズムの現在
—県外と県内の参加者双方の視点から—

昼食休憩

- B - 6 13:00～13:25 潘 咏雪 (筑波大学大学院)
皇会を語る／皇会を担う
—都市祭礼における天津民俗博物館スタッフの二重性—
- B - 7 13:30～13:55 堀田奈穂 (関西学院大学大学院)
ハレ・ケ・ケガレ論再考—二つのケガレ観に着目して—
- B - 8 14:00～14:25 徳永紗英 (東京大学大学院)
「型」を切り口とした高齢者の繰り返し語りの分析
—ままならない語りを捉えるための一試論—
- B - 9 14:30～14:55 園田美雪 (総合研究大学院大学)
郷土教育に見る民俗文化—昭和初期の柳田國男・宮本常一の議論を中心として—
- B - 10 15:00～15:25 齋藤正憲 (白鷗大学)
巫の裏側：レヴィ＝ストロースの眼差し
- B - 11 15:30～15:55 檜村賢二 (鳥取県立博物館)
民俗社会における村落空間の認識について
—ムラの領域の模式図の発展を目指して—

■C 会場 (3階中多目的室)

- C - 1 9:30～9:55 杉浦ちなみ (法政大学)
1970～1980年代の教育現象のなかの「郷土」と「ふるさと」
—青少年地域活動(ふるさと運動)を事例に—
- C - 2 10:00～10:25 東 資子 (岩手県一関市教育委員会)
民俗芸能の継承と学校教育—岩手県一関市の事例から—
- C - 3 10:30～10:55 川村清志 (国立歴史民俗博物館)
地域社会の自己表象としての故郷とその重層性
—輪島市七浦小学校同窓会誌を事例として—

C - 4 11:00～11:25 張 睿雯（筑波大学大学院）

「悔しさ」は地域を動かすか？

ー福岡県宗像市大島における U ターン・I ターン者の観光実践の動機ー

C - 5 11:30～11:55 武田俊輔（法政大学）三隅貴史（広島修道大学）

祭礼・民俗芸能のメディアイベント化ー「ふるさとの歌まつり」を事例としてー

昼食休憩

C - 6 13:00～13:25 坂川優介（東京大学大学院）

戦争遺跡と周期行為

ー大正期の福島県若松市における「戊辰殉難者祭典」を事例としてー

C - 7 13:30～13:55 原 英子（岩手県立大学）

民俗学で戦争を考える 3 定点から観た戦中・戦後の看護師たちの民俗誌

ー陸軍病院から国立病院へー

C - 8 14:00～15:55

《グループ発表》 アンチ・ジオポリティクスとしての民俗学に向けて

代表 塚原伸治（東京大学）

「地方都市」の憂鬱と希望 ー「昔はよかった」町を生きることー
辻本侑生（静岡県）

地方都市の性的マイノリティをめぐる空間的・社会的・歴史的布置
門田岳久（立教大学）

〈南〉のジオ・ポリティクス：沖縄における脱領域化的実践をめぐって
真柄 侑（国立歴史民俗博物館）

海を越えるエラブの生業

ー沖永良部島和泊町における花卉・サトウキビ生産を中心にー

■ D 会場（3 階工芸室）

D - 1 9:30～9:55 井上卓哉（静岡県富士山世界遺産センター）

現在のトチノミ加工と忘れられたトチバヤシの実態

ー長野県栄村秋山郷の事例からー

D - 2 10:00～10:25 加藤秀雄（滋賀県立琵琶湖博物館）

ダム上流域の人とアユの関係を考える

ー神通川水系における漁業組合の取り組みを事例にー

D - 3 10:30～10:55 矢嶋正幸（埼玉県立川の博物館）

麦作用具「フリコミジョレン」について ー開発・普及・分布ー

D - 4 11:00～11:25 村田典生（佛教大学）

キリシタン達の相克・葛藤・融和ー長崎県外海地域を事例としてー

- D - 5 11:30～11:55 杉田 愛 (國學院大學大学院文学研究科博士前期課程)
近世日本のフクロウイメージ - 本草書の分析から -

昼食休憩

- D - 6 13:00～13:25 川西彩夏 (関西学院大学大学院)
岡山の魔法信仰 - 「魔法様」の狸伝承に注目して -
- D - 7 13:30～13:55 森田 玲 (関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程)
エビス神はなぜ耳が遠いのか? - 魚を招く霊石の志向性と海の記憶
- D - 8 14:00～14:25 川野和昭
人は何故笛を吹くのか - 笛と風と霊と -
- D - 9 14:30～14:55 樽井由紀 (奈良女子大学)
温泉の力 - 北海道豊富温泉の湯治を事例に
- D - 10 15:00～15:25 戸邊優美 (甲南大学)
埼玉県民俗文化財分布調査票に見る「はきもの」の諸相

11. オンライン研究発表（11月8日）

■E 会場（オンライン）

- E - 1 10:00～10:25 呉屋淳子（沖縄県立芸術大学）
課題セッション「日本の〈南〉の民俗学―鹿児島・奄美・沖縄―」
《安里屋ユンタ》と出会い直す―琉球列島の近現代から考える
- E - 2 10:30～10:55 澤井真代（多摩美術大学非常勤講師）
課題セッション「日本の〈南〉の民俗学―鹿児島・奄美・沖縄―」
奄美沖縄における女性宗教者の新生―新生者の力をめぐって
- E - 3 11:00～11:25 猪岡叶英（大阪歴史博物館）
沖縄出身者が祖先祭祀を引き継ぐということ―沖縄市の事例から―
- E - 4 11:30～11:55 谷口生貴斗（筑波大学大学院）
伝承される移住者
―福岡県糸島から滋賀県大津へ移住した男性をめぐる移住先・移住元の語りから―

昼食休憩

- E - 5 13:00～13:25 三宅 元氣（くりでんミュージアム）
変化する記憶・保持される記憶
―福岡県内の享保の飢饉をめぐる地蔵・石碑を事例に―
- E - 6 13:30～13:55 村尾美江（香川民俗学会）
水嶋系小笠原流の礼法家の影響による民俗変容
～包丁式四條流家元石井泰次郎の日記から～
- E - 7 14:00～14:25 吉野 裕（日本大学文理学部）
大分県における牛馬の守護神とその信仰圏に関する研究
―大將軍神社を事例として―
- E - 8 14:30～14:55 法木 航（東京都）
地方自治体における偉人の顕彰―近代における太田道灌顕彰を事例として―
- E - 9 15:00～15:25 中山なな（早稲田大学人間科学学術院）
近世江戸における「境界的な存在」への眼差し―発掘された墓を読み解く―

■F 会場（オンライン）

- F - 1 10:00～10:25 小林裕美（國學院大學大学院）
白間津のオオマチの「お浜出」
- F - 2 10:30～10:55 角谷彩子（文化学園大学）
「翁」を中心とした衣装の比較調査
―長野県佐久市旧臼田町「三条神社」の式三番叟―

- F － 3 11:00～11:25 岸澤美希（國學院大學大学院）
宮崎県東臼杵郡椎葉村 十根川神楽 継承への取り組みと変化
- F － 4 11:30～11:55 益子美砂（國學院大学院文学研究科）
赤米神事の継承と地域社会の相関 ～対馬豆酩を事例に～

昼食休憩

- F － 5 13:00～13:25 中西 仁（立命館大学）
京都標準の神輿の舁き方の起源と展開
- F － 6 13:30～13:55 印南小雪（國學院大學大学院文学研究科）
町会と神輿会－東京都品川区の小山両社祭の場合－
- F － 7 14:00～14:25 馬 斐斐（埼玉大学人文社会科学研究科博士後期課程）
祭りにおける女人禁制解除へのプロセス
- F － 8 14:30～14:55 李 江龍（愛知県立大学大学院）
ナマハゲの観光資源化－秋田県男鹿市真山地区を事例として－
- F － 9 15:00～15:25 鬼頭慈都（同朋大学仏教文化研究所）
女性の祭り参加について－尾張津島秋祭りの事例から－
- F － 10 15:30～15:55 道前美佐緒（流通科学大学）
ウェディングチャペルの創造－本物の評価基準

■ G 会場（オンライン）

- G － 1 10:00～10:25 赤岡 唯（國學院大學大学院文学研究科）
姥捨山伝承の再検討
- G － 2 10:30～10:55 小林光一郎（横浜市歴史博物館）
文化財に指定された民謡・民話－鳥取県指定有形民俗文化財「山陰における口承文芸の記録（童謡・民話等）」について－
- G － 3 11:00～11:25 関口 隼（國學院大学大学院）
妙圓地蔵の現在－東京都調布市の暮らしの変遷から－
- G － 4 11:30～11:55 立柳 聡（福島県立医科大学）
八丈島のおちゃらかし猫譚

昼食休憩

- G － 5 13:00～13:25 福西大輔（大分県）
うば神信仰が八幡信仰に与えた影響に関する一考察
－愛媛県松山市の生石八幡神社・朝日八幡神社の事例を中心に－
- G － 6 13:30～13:55 下門茉生（國學院大學大学院）
節分のヤキカガシと魚

- G - 7 14:00～14:25 鈴木一彌（総合研究大学院大学）
婚姻儀礼における進行を司る人物についての考察
－「待女郎」「待女房」に注目して－
- G - 8 14:30～14:55 工藤 豪（非常勤講師）
婚姻をめぐる変容－世田谷区の事例を中心にして－
- G - 9 15:00～15:25 正月谷眞子（成城大学大学院博士課程後期）
異人と異界の香り・におい－伝説・昔話にみる神仏の香り－

■H 会場（オンライン）

- H - 1 10:00～10:25 伊藤早穂子（足立区立郷土博物館）
「そこにあり続ける山林」と所有権者の民俗学的研究
－共有地の移転登記を事例に－
- H - 2 10:30～10:55 渡部鮎美（青森公立大学）
青森県蓬田村におけるホタテ養殖業への推移
－半農半漁村の村の変化と生活像の変遷－
- H - 3 11:00～11:25 林 春伽（比治山大学）
漁業と観光業の共存のために－愛知県の離島日間賀島の観光地化に着目して－
- H - 4 11:30～11:55 小笠原輝（山梨県富士山科学研究所）
富士山北麓におけるスズタケ採取とその動画分析

昼食休憩

- H - 5 13:00～13:25 石塚祥太（國學院大學大学院文学研究科）
埼玉県内の養蚕業における技術伝承
- H - 6 13:30～13:55 堀内香歩（國學院大學大学院）
長野県東信地域の養蚕信仰
- H - 7 14:00～14:25 坂爪 裕（慶應義塾大学大学院経営管理研究科）
複合生業を下支えする掃除・片付けの機能－近代複合生業農家の日誌分析－
- H - 8 14:30～14:55 樋田竜男（たかやまそふと）
有翼日輪とハロ：Y字表象を例として
- H - 9 15:00～15:25 藤原美樹（國學院大學大学院 博士後期課程）
折口信夫の靈魂論と雑誌『民族』
- H - 10 15:30～15:55 河野 眞（比較民俗学会）
マティルデ・ハインの『ドイツの農村と民俗衣装』
－民俗衣装研究とドイツ語圏における女性民俗研究者の草分けの紹介－

12. 対面発表（11/2）プログラム

会場名 (場所)	A会場 課題セッション (1階マチナカホール)	B会場 (3階大多目的室)	C会場 (3階中多目的室)	D会場 (3階工芸室)
9:30-9:55	A-1 課題セッション 角南聡一郎	B-1 小柳花音	C-1 杉浦ちなみ	D-1 井上卓哉
10:00-10:25	A-2 課題セッション 山本芳美	B-2 鍋田尚子	C-2 東 資子	D-2 加藤秀雄
10:30-10:55	A-3 課題セッション 武井基晃	B-3 福 寛美	C-3 川村清志	D-3 矢嶋正幸
11:00-11:25	A-4 課題セッション 越智郁乃	B-4 源 園生	C-4 張 睿雯	D-4 村田典生
11:30-11:55	A-5 課題セッション 森田真也	B-5 塩月亮子	C-5 武田俊輔・三隅貴史	D-5 杉田 愛
休憩				
13:00-13:25	A-6 課題セッション 郭 立東	B-6 潘 咏雪	C-6 坂川優介	D-6 川西彩夏
13:30-13:55	A-7 課題セッション 古谷野洋子	B-7 堀田奈穂	C-7 原 英子	D-7 森田 玲
14:00-14:25	A-8 課題セッション 永迫俊郎	B-8 徳永紗英	C-8 《グループ発表》 代表 塚原伸治 辻本侑生 門田岳久 真柄 侑	D-8 川野和昭
14:30-14:55	A-9 課題セッション 久留ひろみ	B-9 園田美雪		D-9 樽井由紀
15:00-15:25	A-10 課題セッション 小野恭一	B-10 齋藤正憲		D-10 戸邊優美
15:30-15:55	A-11 課題セッション 政岡伸洋	B-11 樫村賢二		

13. オンライン研究発表（11/8）プログラム

会場名	オンラインE会場	オンラインF会場	オンラインG会場	オンラインH会場
9:30-9:55				
10:00-10:25	E-1 課題セッション 呉屋淳子	F-1 小林裕美	G-1 赤岡 唯	H-1 伊藤早穂子
10:30-10:55	E-2 課題セッション 澤井真代	F-2 角谷彩子	G-2 小林光一郎	H-2 渡部鮎美
11:00-11:25	E-3 猪岡叶英	F-3 岸澤美希	G-3 関口 隼	H-3 林 春伽
11:30-11:55	E-4 谷口生貴斗	F-4 益子美砂	G-4 立柳 聡	H-4 小笠原輝
休憩				
13:00-13:25	E-5 三宅 元氣	F-5 中西 仁	G-5 福西大輔	H-5 石塚祥太
13:30-13:55	E-6 村尾美江	F-6 印南小雪	G-6 下門茉生	H-6 堀内香歩
14:00-14:25	E-7 吉野 裕	F-7 馬 斐斐	G-7 鈴木一彌	H-7 坂爪 裕
14:30-14:55	E-8 法木 航	F-8 李 江龍	G-8 工藤 豪	H-8 樋田竜男
15:00-15:25	E-9 中山なな	F-9 鬼頭慈都	G-9 正月谷眞子	H-9 藤原美樹
15:30-15:55		F-10 道前美佐緒		H-10 河野 眞

14. 公開シンポジウム

日本の〈南〉の民俗学 ―鹿児島・奄美・沖縄―

趣 旨

これまで日本民俗学会が日本の〈南〉で企画してきた年会は、1990年代初頭の計2回であった。その場所とテーマは、1990年の沖縄大会における「沖縄民俗研究の展望―東アジアの中の沖縄―」、1994年の鹿児島大会における「南九州の民俗の地域性と民俗学」で、それぞれ開催地の民俗を理解する方法の検討や視座をめぐって企画されてきた。本年会の奄美大島での開催は、そこから約30年ぶりの日本の〈南〉での年会となる。また、近年の年会が慣例的に大学機関を会場に開催されてきたなかで、今回久しぶりの地域開催の試みとなる。

奄美大島は、奄美群島（奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島）を構成する島のひとつである。当域は行政区画のうえで鹿児島県に含まれているが、中世相当期に琉球国の版図に含まれていた歴史的経過から、言葉、芸能、行事等には沖縄県域に通じた民俗文化が保持されてきたことが知られている。それによって本年会では、鹿児島・奄美・沖縄の民俗に焦点を当て、当域をフィールドに研究をすすめている方々に登壇を依頼した。

第一部では、鹿児島・奄美・沖縄、それぞれの地域における民俗研究の動向を俯瞰したい。最初に、各団体会員に地域における研究状況を紹介していただくとともに、登壇者の目からみた〈南〉の民俗学を語っていただく。その後、研究領域として重層する「奄美」もひとつのキーワードとして、今後のそれぞれの民俗研究の可能性について意見の交換を行いたい。

第二部では、民俗学が研究対象としてきた幅広いテーマの中から、民俗芸能に焦点を当てる。まず、南九州から奄美群島にかけて分布する民俗芸能における琉球系・沖縄系／ヤマト（日本本土）の混交の問題に注目する。続いて南西諸島最南端に位置する八重山諸島の多種多様な民俗芸能の研究状況と今後の展望について検討する。最後に、海外や（沖縄）県外における沖縄系人の多彩な芸能活動に注目し、それが沖縄や奄美の民俗芸能研究にどのような影響を与えうるかについて議論してみたい。

以上を通して、日本の〈南〉の民俗学の更なる発展につなげていきたい。

【第一部】 それぞれの〈南〉の民俗学

進行：服部比呂美（東京都／國學院大學）

【第二部】 日本の〈南〉の民俗芸能研究

進行：久万田 晋（沖縄県／沖縄県立芸術大学）

鹿児島県の民俗学

小島 摩文（鹿児島県／鹿児島純心大学）

現在、鹿児島県とよばれている地域でいつごろから民俗学の調査・研究が行われてきたか正確に指摘することは難しい。柳田国男は、年譜で昭和 11 年に「4 月 11 日～5 月 6 日、長男為正とともに九州旅行」とあり、このとき 4 月 27 日から 5 月 3 日まで鹿児島に滞在した。この時の座談会などが契機になり、翌昭和 12 年に鹿児島民俗研究会の『はやと』が創刊される。冒頭には柳田国男の「鹿児島県と民俗研究」と題した文章が掲載された。これより 3 年前、昭和 9 年にアチック・ミュージアム「薩南十島調査」を行っている。これは、渋沢敬三を中心とした 20 名以上の様々な分野の研究者が参加した調査だった。

この両方の出来事に中心人物として、しかし”裏方”として関わっていたのが、永井龍一である。永井は、この時期鹿児島市内の私立の高等女学校に籍をおいていたが、長く大島郡の群視学をつとめたひとで、『南島雑話』をはじめ田代安定『薩南諸島の風俗余事に就て』1890、白野夏雲の『七島問答』1932、『十島図譜』1933、赤堀廉蔵の『島嶼見聞録』1932、などの謄写版での復刻を自費で行うなど、幕末期から明治期にかけて民俗学的資料とよべるものを誰でも閲覧できて研究に資するように務めた人であった。永井は奄美大島の出身で、月刊誌『旅と伝説』の編集・発行人であった萩原正徳は、永井の甥にあたる。昭和 10 年には民俗調査を始めていた喜界島出身の岩倉市郎など、鹿児島県の民俗学は奄美群島からはじまったといっても過言ではない。

その後、昭和 25 年(1950)に、あらたな鹿児島民俗学会の機関紙『鹿児島民俗』が発行された。村田熙が鹿児島の民俗学研究をけん引していくことになる。鹿児島で民俗学の研究を担ったのは、多くが高校の教員であった。また、鹿児島県内各地に郷土研究会などの名前で郷土史も含めた民俗学を研究する会もつぎつぎと設立された。

昭和 33 年には、台湾から帰国して指宿高校に勤務していた国分直一が『薩南民俗』を創刊し、生徒に民俗調査や考古学調査を始動するとともに小野重朗にも参加を促した。翌年には、中種子高校に勤務していた下野敏見が『種子島民俗』を創刊。下野は、昭和 32～34 年にかけて広田遺跡の発掘のために来島していた金関丈夫、国分直一から民俗学調査の手ほどきを受けている。昭和 30 年代の鹿児島の民俗学は誌系でいうと『台湾民俗』の流れを汲んでいるといってもいい。研究テーマが国分直一の関心があるものに比重があるようにみえる。

昭和 37 年の第 1 回柳田国男賞を下野敏見が、昭和 39 年の第 3 回を小野重朗が受賞するなど、鹿児島の民俗学研究は、中央でも高く評価されることとなる。これ以降、村田熙、小野重朗、下野敏見が中心となり鹿児島の民俗学研究をけん引していくことになる。他県との大きな違いとしては、周囲論を用いた研究が盛んに行われたこともあげられる。また、反面、分布研究にそぐわないテーマが避けられた感もある。

誌名は何度か変わったが、鹿児島民俗学会機関誌は年に 2, 3 号発行され、投稿者も多く、活発な活動が現在も行われている。昭和 53 年には、鹿児島民具学会も設立され、機関紙『鹿児島民具』を発行し、会員が集まって共同調査を行うなど、こちらも活発に活動を行ってきた。

高齢化が心配されていたが、それぞれ若い会員も増えつつあり、さらに地道な研究が行われている。

奄美の民俗学

町 健次郎（鹿児島県／瀬戸内町立図書館・郷土館）

奄美群島は、喜界島・奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島・徳之島・沖永良部島・与論島の有人八島から成る。ここでは総称して「奄美」とし、当域を研究対象とした民俗学（民俗研究）をめぐって奄美大島を中心に紹介したい。

近代以降では、明治 35 年『東京人類学会雑誌』の場に昇曙夢が「薩南大島の話」を書いている。これは沖縄の伊波普猷が「沖縄人の祖先に就いて」を明治 39 年に発表した時期と近く、奄美と沖縄の出身者がほぼ同時期に民族の南漸論や日本との接続を説いていたといえる。大正期に入ると柳田國男が 9 年～10 年の琉球旅で奄美大島にも入り、同 14 年に『海南小記』が生まれた。この大正期末には奄美大島古仁屋出身の茂野幽考が 2 年半の帰郷後、昭和戦前期に『奄美大島民族誌』を出版したほか、雑誌『旅と伝説』にも投稿が掲載されている。

戦後 8 年間の米軍統治下にあった時期では、昇曙夢が昭和 24 年に民俗記述を含む『大奄美史』を刊行。当時、昇は全国奄美連合総本部委員長に就任しており、分断された日本人が住む島嶼の存在を世論に訴える意思が『大奄美史』に込められてダレス長官代理ストックに復帰請願書と共に贈呈されている。

復帰後、米国から派遣されたダグラス・G・ハリングの調査に協力していた文英吉をはじめ、地元有志が昭和 31 年に「奄美史談会」を結成する。しかし、文が急逝したことで、代表を島尾敏雄が引き継いで 1958(昭和 33)年に奄美郷土研究会として再出発した。初期の民俗関係の投稿者には、恵原義盛、田畑英勝、山下文武、甲東哲、長田須磨の名がみえる。昭和 30 年代半ばには、加計呂麻島のノロ祭祀の調査に、柳田國男の助言を受けた伊藤幹治、ヨゼフ・クライナーや植松明石が入っている。

昭和 40 年代には、県立大島工業高校教員で赴任した山下欣一が「奄美学」を提唱し、鹿児島の民俗研究者を交えてシンポを行った。山下は「奄美の人が〈奄美〉をどう考えていくか」、自らを問う姿勢を持つことを願って提唱し、その成立の可否を問う議論は後に、山下欣一の薫陶を受けてきた島内在住の次世代（奄美民俗談話会）に引き継がれ、各種シンポジウムの開催や平成 17 年『奄美学—その地平と彼方—』の刊行につながっていった。この段階までに口承文芸、歌謡研究のテーマについては一定の成果が示され、衰退期にあったノロ祭祀研究も時代的に記録の機会が間に合ったと振り返ることができる。しかし、その他のテーマ（民具などの物質文化、農業・漁業など生業論など）については、研究者の関心が網羅的に向けられてきたとは言い難い状況があった。

昭和 40～60 年代に奄美を歩いて調査した成果は、平成中期（1990 年代）あたりをピークに書籍化されていった。その奄美研究の視角を大別してあげると、①奄美内部の様相を捉える研究（恵原義盛 1973、山下欣一 1977、小川学夫 1979、高橋一郎 1994、登山修 1996、田畑千秋 1997、先田光演 1999 など）、②日本・鹿児島との相対的比較で捉える研究（下野敏見 1989、小野重朗 1982 など）、③琉球・南島の枠組みによる研究（仲松弥秀 1968、上江洲均ほか 1983、酒井卯作 1987 など）がある。

概略、上記の経過を軸に紹介していくことにしたい。

沖縄の民俗学と奄美

萩原左人（沖縄県 / 琉球大学）

奄美（奄美諸島）と沖縄（沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島）は、琉球列島を構成する島嶼地域である。これらの地域は、かつては琉球国の版図であったが、1609年の島津氏侵攻による分離（薩摩藩直轄の奄美、間接支配下の琉球国）を経て、現在に至るまで複雑な歴史をたどってきた。今日沖縄における民俗学の調査研究は膨大な蓄積がなされているが、ここでは特に「沖縄からみた奄美の民俗」に限定し、これまでの動向の一部を記す。

沖縄からの奄美への関心は、民俗学の早期からみられた。伊波普猷（1938年）は、「島津氏の琉球征伐後間もなく、薩藩の直轄となって、爾来琉球との交渉が殆ど無くなった奄美大島は、琉球の事物で、慶長以前のものであるか、それ以後のものであるかを判断するに、大体の目安になる、と私は考えている」と述べている。奄美と沖縄に共通する民俗については、島津氏侵攻以前の琉球文化に由来する可能性があることを指摘したものである。こうした伊波の考え方（共通性をめぐる認識）は、その後の沖縄側からの奄美研究に大きな影響を与えたものと思われる。源武雄（1972年）は、両地域が「一つの方言圏・民俗圏」を形成しているとし、これを「琉球弧民俗圏」と呼んでいる。

戦後の研究では、奄美と沖縄の民俗に共通性をみとめつつ、地域的な相違点にも関心が向けられた。仲松弥秀（1975年）は、聖地・祭場・祭司制度などにおいて共通性がみられるものの、侵攻以後の村落や祭祀の再編成のあり方に地域的な差異が形成されたことを論じている。比嘉政夫（1979年）は、両地域の年中行事について「連続と断層」があるとし、民俗の地域的変差を掘り起こす必要性を指摘している。津波高志（2012年）は、奄美の祭司・葬制・相撲などをめぐり近世・近代の奄美で起きた「文化変容」の様相を明らかにし、「薩摩藩による琉球侵攻は、奄美における文化変化の方向性を沖縄とは異なる方向に移行」させたと述べている。同（2023年）では、複雑な歴史を有する奄美諸島・沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島においては、それぞれの「歴史の被覆」の違いに留意しつつ、全体的な共通性や地域的な相違点を理解する必要があることを主張している。

研究団体については、全国規模の諸団体や、沖縄民俗学会をはじめとした沖縄県内の諸団体が活動しており、琉球列島各地で民俗の調査研究を続けている。

【文献】 伊波普猷「南島の稲作行事について」『をなり神の島』1938年、津波高志『沖縄側から見た奄美の文化変容』2012年、津波高志『『沖縄文化』の理解に向けて』『沖縄民俗研究』37号 2023年、仲松弥秀『神と村』1975年版、比嘉政夫「最近の奄美研究瞥見」『新沖縄文学』41号 1979年、源武雄「沖縄の民俗—その位置づけと特色」『沖縄県史 22 民俗 1』1972年

第二部 日本の＜南＞の民俗芸能研究

本セッションでは、日本列島の南に広がる南西諸島の島々に伝承されてきた民俗芸能に注目し、奄美群島および日本最南端の八重山群島の民俗芸能の研究状況を検討する。さらに沖縄県外、国外に広がる在外沖縄系人の芸能活動にも着目し、研究の現状と今後の課題・展望について議論してみたい。

(1) 奄美の島々の芸能—九州と沖縄のあいだで— 発表：笹原亮二

九州と沖縄のあいだに位置する奄美群島は、奄美大島・加計呂麻島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島から構成される。これらの島々には、加計呂麻島の諸鈍シバヤ、徳之島の田植歌、与論島の十五夜踊りといった特定の島でのみ見られる芸能、奄美大島の八月踊りと同系統の喜界島の八月踊りや徳之島の夏目踊り・千人踊りなどの折目踊りや沖永良部島の遊び踊り、与論島や加計呂麻島の二人立の獅子舞といった複数の島で見られる芸能など、様々なかたちで島々に分布する多くの芸能が伝わっている。こうした奄美の島々の芸能について、隣接する南九州・薩南諸島や沖縄の芸能を視野に収めて概観を試みる。

(2) 八重山芸能の課題と展望 発表：飯田泰彦

琉球弧の最南端に位置する八重山地域は、石垣島、竹富島、小浜島、黒島、新城島、波照間島、鳩間島、西表島、由布島、与那国島の有人島と、その他無人島で構成される。八重山地域の島嶼性は、地理的・地質的な差異のみならず、島ごとに個性的な伝統文化を育んでいる。そのなか民俗芸能も同質化・均質化を免れ、多様なかたちで伝承されてきた。これらは伝統的に農村社会、とりわけ年中祭祀が主な伝承母体となってきた。しかし、近現代を経るなかで、芸能の演じられる場は、時間・空間の制約を越えて拡大されていった。現在、このような事象に伴った利害得失が見受けられるが、具体的な事例を示し、そこから八重山芸能の課題と展望を見いだしたい。

(3) 在外沖縄系人の芸能活動研究の課題と展望 発表：澤田聖也

沖縄県は、国内有数の移民県である。特に、沖縄移民は、関東、関西、北米、南米を中心に渡り、その地域と一線を画す沖縄系社会や文化を形成し、現在ではその子孫を中心とした沖縄系コミュニティが存在する。そのため、人文社会科学の分野において蓄積された研究成果も一定数あるが、その多くは、「沖縄—日本本土」の非対称的な権力構図による差別構造やアイデンティティ問題を通した沖縄人の日本人同化や対抗的活動に焦点を置き、芸能活動は副次的・周辺的要素としてほとんど議論されてこなかった。そこで、本発表は、在外沖縄系人の芸能研究の位置付けとその課題と展望を提示することで、国内外の琉球芸能研究の重要性を提示する。

日本民俗学会第77回年会実行委員会

年会会長 大石泰夫

実行委員長 町健次郎

事務局長 宅間道和

事務局 飯倉義之 河村貴志 喜友名正弥 大楽和正

実行委員 荒木優也 伊藤龍平 泉和子 川野和昭 久万田晋 小島摩文 里朋樹 萩尾俊章

萩原左人 服部比呂美 福原凡香 久伸博 久留ひろみ 松原武実 森紘道

八木橋伸浩 山岡英世 渡聡子

年会会場・懇親会会場



第77回年会実行委員会事務局

〒894-0036 鹿児島県奄美市名瀬長浜町517

奄美市立奄美博物館内

日本民俗学会第77回年会実行委員会事務局

E-mail : nenkai77@fsjnet.jp

※ お問い合わせはE-mailをご利用ください。